JPCOAR Newsletter
CoCOAR NO.16

最終号

発行：オープンアクセスリポジトリ推進協会
jpcoar@nii.ac.jp

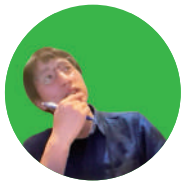
Contents

在野研究者インタビュー / 連載「気になる話題をPICK UP!」/ ROARMAPとOAポリシー策定ガイドの紹介 / イベントレポート（Workshop on Digital Library Development・勝手にコメンタリー・OAWグッズ）/ 作業部会の活動広報

在野研究者
巻頭特集：荒木優太氏インタビュー

テーマ
開かれながら閉じる：在野研究者として考える情報発信とコミュニケーション

リポジトリに登録した文献は、だれに、どんなふうに使われているのだろう。ユーザの声を聴きたいという思いから、今回は「在野研究者」として積極的に情報発信をされている荒木優太氏にインタビューを行いました。オープンアクセスに留まらず、図書館という場、コミュニケーションそしてコミュニティのオープン／クローズについて、在野研究者としての視座と専門領域を絡めて示唆に富むお話をいただきました。



在野研究者
荒木優太

｜インタビュアー・編集｜
熊﨑 由衣（千葉大学・広報・普及作業部会）

研究テーマや研究生活についてお聞かせください。

在野研究者というのは、一言で言うと大学に属さずに研究活動を行っている人です。私は、日々の糧は清掃の労働で得ていて、早朝に起きて清掃に行き、午後に研究をしています。

私が在野研究者とみなされたきっかけは、2016年に『これからのエリック・ホッファーのために：在野研究者の生と心得』という図書を出版したことです。これは過去の在野研究者たちの生きざまや研究成果を要約しており、今とこれからの在野研究者たちの一つの励みあるいは方針になるのでは、と考えて書きました。続いて出したのが『在野研究ビギナー

ウェブの資料においても、引用したい、あるいは引用したとき信頼に値すると評価されると思えるような資料の閲覧時間が増えていると感じます。――

ズ：勝手にはじめる研究生活』です。前の著作が過去の人を扱ったのに対し、現在活躍している大学の外で活動する研究者、研究支援者たちに対して、どうしてそういうことをしようと思ったのか、あるいはその営みと普段のあまり研究とは関係ないお仕事との両立などについて書いてもらう編著の形で出しました。これが割と多くの人々に読まれ、色々な反応をいただけて、在野研究という言葉も世に大きく広がっていったかなと思っています。

私の専門は有島武郎です。彼がどんな文献と出会って考え方を固めていったのか、あるいは今日から見ると謎めいた言説のありようを当時の文脈を踏まえて読み解き、有島武郎を今日読む価値を改めて見出しています。その成果は岩波新書から『有島武郎：地人論の最果てへ』として出版しました。啓蒙書なので厳密な意味での論文ではありませんが、区切りとなる著書です。

今は色々と同時並行で行っています。研究の関心においては、有島武郎関係の各論を深めています。例えば有島と地理学との関係で、彼はアーノルド・ギヨーという地理学者の著作を読んでいるので、その言説的な関係を改めて復元しています。また、有島の親友とされている森本厚吉という経済学者との関係。森本は有島の晩期において彼の社会運動を手伝っていましたが、彼らの著作を読み比べるとその考え方が大きく異なっていることが分かります。違いがありつつ、それでも協働できた背後について調べています。

他方で、研究というほど専門的ではない、評論やノンフィクション的なお仕事もあります。例えば、戦後のサークル文化の勃興やその展開に関する著書を6月頃に出版する予定です。この種の仕事に、2021年に出した『転んでもいい主義のあゆみ：日本のプラグマティズム入門』というプラグマティズムの日本における展開をまとめた本があります。在野研究は社会的なポジションの性質上、大学と縁のないような分野の研究が盛んでした。この視点で哲学に目を向けたときに、大学でやるのはちょっとねと除け者にされてきたのが、私の認識だとプラグマティズムに相当します。プラグマティズムは哲学史においてあまり大きな影響力を持ち得なかったと思っていますが、本当にそれだけでいいんだろうかという問題意識の下、日本でのその系譜を再現しようとしたのがこの著書です。狭義の専門とは異なりますが、前述の森本厚吉がプラグマティズム的な思想を書き残しており、有島との対照性を考える上で役立ちました。回り回って自分の専門領域に帰ってきたという感じがして、この点では大きな充実感を得ています。

基本的な作業は、研究でも物書き仕事でもあまり変わりません。私の場合は読むことが大きなウェイトを占めており、文献を読み先行研究を調べながら、自分にない視点への気づきやまだ言及されていない論点を見つけ、その着想から様々な資料を援用しつつ自説をつくり上げていく。これはほとんど変わりません。ただ、結果に落とし込むときの形が違いますね。研究の場合は論文が一般的で、ある種の様式があり、文体においても読みやすさが必要なので派手なことはできません。対して物書きのお仕事では、専門的な読者を目当てにした論文とは違って、もっと一般的な方々に読まれることを意識せねばならないので、読んでいて面白い、時には感情が揺さぶられるような仕掛け、レトリックを介在させることが重要だと思ってやってきました。ですので、アウトプットの仕方で微妙に使い分けがあるという感じがします。ただ、その前段階の作業というのはほとんど変わらないし、変わってもいけないだろうと思っています。

研究における図書館や資料の利用、困難などについてお聞かせください。

私の母校である明治大学では、卒業すると「校友」になり、明治大学図書館の利用、貸出といった機能が大体使えます。ただ、コロナ禍以降、大学図書館の使用権が一切なくなってしまって、資料を参照するのに苦労しているというのが正直なところです。リアルの資料を見られないので、国会図書館に代表されるようなデジタルな資料の閲覧が増えたと思います。

利用の総体的な割合は、紙が7割、デジタル3割くらいです。ただ、論文の執筆に必要な資料の種類は内容で違います。有島と地理学の影響を調べたときに使ったのはインターネットアーカイブで、ここでアーノルド・ギヨーの原著が読めました。それをひたすら訳していく作業が大半を占めていたので、5：5あるいは4：6とウェブから仕入れる資料が結構大きくなったと思います。研究をはじめてから10年を経て、ウェブの資料においても、引用したい、あるいは引用したとき信頼に値すると評価されると思えるような資料の閲覧時間が増えていると感じます。私が論文を書き始めた頃は信頼性に疑問がある記事ばかりという印象でしたが、今はもう少ししっかりしたものが見られます。また人々の側もインターネットにある言説だからといって二流、三流という偏見みたいなものもかなり解除されてきているなという観があり、使える資料は確実に増えているのが実感です。

ただ、やっぱりぱらぱら読むという作業が電子書籍やPDFだとできないですよね。つまりインターネットの世界においては、かなりピンポイントにこれが知りたい、読みたいという対象がないとあまり使いものになりません。それとは別に、研究のある種の発想力というのは関係ないところで見つかる、つまり自分の考えているのと

半分は人々のために、もう半分は自分自身のためにインターネットを活用してみようじゃないかと、そういうことに意識的になったのがコロナ以降です。

はちょっと別のところに細道があって、でもこの細道が結構重要、みたいなことはよくあります。細道を見つけるためには、ちゃんと読んでいないんだけども目に入ってくるような情報がばらばらとある、そういう状態を維持することが実は大事だとずっと思っているんです。これは恐らく書架の問題とも関連しています。コロナ禍以降、国会図書館にはよく行きます。そういう意味では資料へのアクセシビリティはあるのですが、明らかに自分が持っているクリエイティビティを喚起する力が発揮されないと思うことがあります。簡単に言うと全て閉架式だからです。これは、知的な作業をやっている人にとってはかなり大きな痛手だなと思います。明治大学図書館を使っていたときは、自分自身で地下の書庫に入って色々な本が並んでいる状態を見ることができる、その中で自分の発想を磨くことができていたと感じます。それは先ほどのぱらぱらめくれるのが大事、ということと恐らくは通底していて、偶発性を誘発する環境をどのように調達するのかというのが大きなミッションです。

コロナ禍は研究活動にどのような影響がありましたか。

聞く側としては学会のオンライン開催が常態化したことによって、参加へのモチベーションがかなり減退してしまったという意識はあります。翻って言うと、コロナ以前に学会で話を聞いてみようと思う動機の大きな部分には、単に最新の研究の知見や情報が欲しいという意欲だけではなく、発表者のある種の息遣いやオーラみたいなものを肌で感じ取りたい、あるいは会場の熱気みたいなものに自分自身が勇気づけられるということがあったんだなと改めて感じます。どこに住んでいるかにかかわらずインターネットで参加できるのは非常に大きな利点があるのですが、私自身はそれで学会に期待していたものが充足されたというと、そうではありませんでした。

また、私はネットに文章を書くだけではなくYouTubeで自分の読んだ本について話すチャンネルをもっています。それは、一つには様々な人々が自分の感想を聞き、それに対して色々言う営みが中々面白いと思っていること、もう一つは、何かしらの形に残しておくと自分も思考を忘れないで済むという利点があることです。また、自分が論文で展開してきたことを口頭で伝えることができたのならば、きっと将来大きなパワーになって返ってくるだろうと思います。半分は人々のために、もう半分は自分自身のためにインターネットを活用してみようじゃないかと、そういうことに意識的になったのがコロナ以降です。

研究でよく使うウェブサイトやツール、それらの物足りない点を教えてください。

ウェブサイトでいうとやっぱり国会図書館関連のものが一番多いと思います。検索ツールを使うのはもちろんですけども、リサーチ・ナビの人文リンク集は非常に有用で、しばしば利用しています。現在は有料のデータベースや海外のツールは使えませんが、特に不便を感じたことはありません。これらは言い換えると、私の研究がこの範囲に収まっているということでもあると思います。

文献検索の際は、CiNiiも使いますが、Google検索で気になるキーワード＋PDFなどで検索すると結構出てきます。また、論文の参考文献で参照される主要な文献を図書館で調べます。インターネットで読める場合は、それもタイトルで検索すればもう直に出てくるから、細かく調べるというよりも、かなりダイレクトに検索ツールを駆使している感じはします。正直なところ、そうやって入手するPDFをどこが作っているのかは二の次なところがあります。私もそうですが、researchmapに自分の論文を貼り付けている方もいらっしゃいますよね。こういったものを拾おうと思うと、一番大きいところから小さいところへ調べていくのがいいのかな、と思っています。文学が顕著なのかもしれませんが、論文という単位よりも本という単位の方がより重要性が高いという理由もあります。もちろんインターネット上で論文が読めてしまえば楽ですが、書誌情報が手に入ればある程度は追跡できるので入手の問題はもうかなり解決されていると言えます。それで入手できない場合は、古本屋で購入する、あるいは古本の検索サイトで見つけたら大枚を払ってでも購入します。図書館を通した文献取り寄せについては、そもそも諦めていて、自力で何とかするしかないよねという認識です。

今伺ったような、情報と出会うためのハンディキャップやコストが研究に影響を与えていますか。

私はかなり注が少ないタイプの研究者です。注が少ないというのは、一つの文献に対する解説や説明の文章が長いということです。恐らく私が在野研究者であるという状況と深く結びついているんじゃないかと反省しています。私は情報を探すあるいは資料を手に入れるという点において、組織に所属する研究者さんと比べてみると明らかに劣っているんですね。その劣っている部分をどうにかしようと考えたときに私が思っているのは、情報と一口に言ってもそれは非常に多層的なものが詰まっているはずで、その多層性が分からないのは受け取り側が解釈の枠みたいなものを理解していないからでしかない、逆に言うと、もっと読み手である自分が機転を利かせたり物の考え方を変えていったりすれば、一つの資料から読み取れることが非常に豊かになるんじゃないかということです。

私は、文学研究ではテクスト論という考え方が好きな方です。テクスト論とは作者の意図を介さずに、テクストそれだけを読んで

開かれながらも閉ざしていくというか、閉じているというような状態を維持して初めて、特に学問や知的な何かに関することというのは一歩前に進むんじゃないかなという直感がある。

解釈していくもので、これもやはり私が在野研究者であるということと関係しています。多くの情報を操ってある世界の全貌を明らかにするというよりも、一つの情報を非常にミクロに読み解いていくことによって、実は皆が知らなかった別の顔を引き出してくる、そういう作業が恐らく向いているんじゃないか。そういうところで勝負していくと、絶望的にも見える職業研究者たちとの闘いも、まあまあちょっとましかな、くらいのところには行けるのかなと思ったりします。

情報発信にお使いのツールやその使い分け、発信することの意義について教えてください。

私が在野研究者を名のり始めたときに思い、今もあるのが、大学に所属している研究者たちのある種の劣化コピーになることはやっても仕方がないという思いです。彼らがそもそもやろうともしないことをちゃんとやっていくのが、恐らくは自分が生き残る道なんじゃないかなという想いが漠然とあったんです。そこでやってみたのが、一つは自分の論文を電子書籍にして発表していくということだったし、それをTwitterで宣伝することでした。ずっとこういう活動をしてきたので、発信、露出みたいなことに関しては、結構意識的にやってきたかなと思います。

同時に、結局それくらいしか手段がないというリアリズムもあるにはあります。自分が物を書き始めた頃は相談できる仲間も別にいなかったし、使える機関だって、図書館を除けば特にはありません。厳密に言うとあるのかもしれないけども、そこに行き着くための強い人的ネットワークが持てない。researchmapも使えると思っていませんでした。そういう状態の中から、何にもしないよりは何かやったほうがいいんじゃないかと考えたときに、取りあえず目の前のものに飛び込んでいったというのが正直なところです。

ですが、現在のTwitterは人々が大量に流入した結果、かなり炎上しやすい場所になってしまいました。学問は誤りを受け入れながら進歩するものですが、今のTwitterはディスカッションにならずちょっと使いにくい場所だと感じます。エアリプを使う人もいますが、明示的に言及してあらゆるものを検索可能な状況にしてほしいですね。私は先ほどYouTubeを始めたと言いましたが、人々が気軽に見られるTwitterとは異なる場所を求めた結果、試しています。私のチャンネル登録者数は約2,000で、このボリューム感の今だからこそそれなりの充実感を持てるんだろうなと思います。

まとめると、もちろん人々に開かれていくということは大事だし、私はそれがあたかも至上命令のようにやってきたところがあるんだけれど、振り返ってみると、開かれながらも閉ざしていくというか、閉じているというような状態を維持して初めて、特に学問や知的な何かに関することというのは一歩前に進むんじゃないかなという直感がある。フォロワーは少ないんだけども人々に開かれているみたいな、そういう状況が今大事なのかなと思っています。

コミュニティやディスカッションの場は閉じていいとのことですが、本当にいいのでしょうか。もう少し詳しくお聞かせください。

私としては、基本的にコミュニティをつくると勝手に閉じていくものだと思っているので、そういう点ではあまり気にする必要がないと考えています。フェミニズムの再評価に並行する形で、例えばコミュニティの男女の数みたいなものを同数に揃えるという発想がありますが、そういったある種の管理があらゆる領域で徹底されてしまうと、恐らく前時代まで私たちが享受してきた学問の自由みたいなものがかなり細くなっていってしまうのではないかと感じます。一見外からはバラエティ豊かで均されているように見えるけれども、コミュニティ内において信頼関係のある発話、すなわち学問的な間違いも許容し合うコミュニケーションができる情況になるのかは疑問です。

言い換えると、コミュニティというものは、かなりの確率である属性に偏っていく。それをそのまま放置して初めて開かれることもあるわけです。だから、質問の意図としては、私は発想が逆なんです。コミュニティというのは勝手に閉じていく、それはある状態まではいいものなんだけども、それを公的な世界に全面的に展開するのは悪い、だからある時点までは放置し、ある時点でそれを均していくことが大事で、これをどういうふうにやっていくかということが今の私の課題です。

荒木さんはオープンであろうとして情報発信されているように見えますが、その観点で、組織の研究者や図書館の可能性についてお考えのことを教えてください。

組織・制度の中にいる人々が疲弊しないで働けるようにならなければいけません。人々が適切な対価を得て文化的な事業に励めないと、サービスの持続可能性には乏しい。だからまずは制度の内側の人々がやれることを整え、元気に働いてほしいです。

私の活動の中で図書館への要望を考えると、例えば自習室でYouTubeを撮影できたら、本について実物とともに紹介することができて魅力的だと思うことがあります。権利の関係もあるでしょうが、場としての開き方も考えてみてほしいです。

また実は今日、多くの研究者たちはオープンに活動しているとい

う実感があります。ただそれが SNS上でのある種の混乱、炎上騒動に発展しているという側面もあります。つまり、研究者が社会的に見られたとき、「その研究って役立たずだよね、公金を使う意味がないんじゃないの」と言われがちな世の中だからこそ、多くの研究者たちが社会に対してアピールしていくという構造があるのだろうなと思います。そのこと自体は決して否定されるべきではないし、私自身も同じような戦略の下でやってきたという自覚はあります。ただ、外へ外へとアピールした結果、果たして本当に成し遂げたいことや目的にしたことが達成されたかというと、やっぱりそこはある種の反省の目を持って見てもいいんじゃないかと思うんです。だから私が途中で言った、開かれることは大事なんだけども、他方で開かれながら閉じるというような何か矛盾した作法を身につけなければいけない、というのは恐らく通底している。何でも露出すればいいという考えには違和感があります。

SNSと論文をオープンにすることはコミュニケーションが異なりますよね。論文をオープンにして、それをコミュニティの議論のきっかけにするという点では問題ないのではないかと思いますが、いかがでしょうか。

学知は公共的なものなので、可能ならば全ての論文はインターネット上で読めるべきだと私はずっと思っていますし、その理念に従ってあらゆる文章をウェブにアップしてきたので、おっしゃっていることは完全に同意です。ただこれにはあまりリアクションがないというのも実感するところです。そこで論文が読まれないのならもっと短文化して分かりやすく伝えようとすると、SNSの短文主義的なものに変わっていってしまう。だから今は単純に短文化するのではなく、YouTubeを試したりしています。

他方で、オープンにしていくときにある種のアーカイブを信じて、インターネットの海に一旦投げておけば、今すぐのリアクションは得られないにしても、数年後とかには誰かしらが何かしらの反応をするんじゃないか、そういう信念を持っているということは大切です。

CoCOAR読者に向けて

仮に私に対して否定的な意見であったとしても、私はできるだけそれを参照したい、聞きたいという思いがあるので、いずれかの機会にそれこそ“オープン”にしていただけたら、私としては嬉しいです。今年は本も出しますし、もしよろしければ既刊を含めて私の活動をチェックしていただけるとありがたいと思っています。（了）

オープンアクセス方針を ROARMAP に登録しましょう！

Registry of Open Access Repository Mandates and Policies

JPCOARでは、オープンアクセス方針の策定を促進するために「オープンアクセス方針策定ガイド」（2018年2月改訂）を提供しています。ガイドでは、方針策定に向けた手順、記載すべき要素、方針のテンプレート、学内説明資料のサンプル等を提供しています。

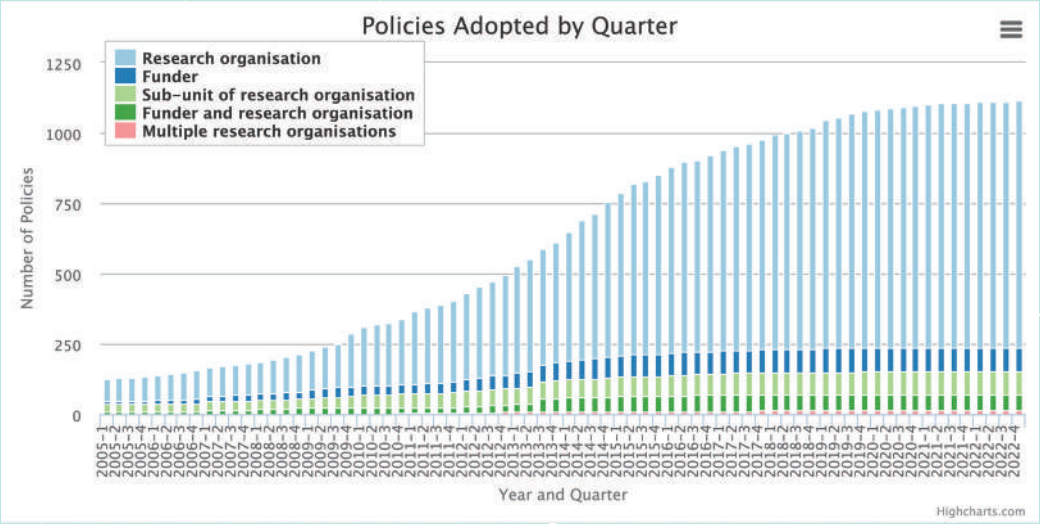
加えて、JPCOAR のウェブサイトで「オープンアクセス方針・実施要領　リンク集」を公開し、国内の方針策定事例を紹介しています。本リンク集はJPCOAR会員の申請に基づき更新しており、現在53件のオープンアクセス方針を掲載しています（2023年1月時点）。

他方、世界中のオープンアクセス方針のリンク集としてROARMAP（ロアーマップ）というサイトがあります。国別に登録状況を調べることができ、現在は「Japan」の方針が19件登録されています（2023年1月現在）。

両リンク集の差分を調べてみると、JPCOAR のリンク集に掲載された53件のうち、ROARMAP に掲載されているのは17件（32%）のみでした（19件のうち2件（文部科学省）はJPCOARのリンク集に掲載されていない。53件のうち3件はROARMAPに登録されているが、JPCOARのリンク集にROARMAPへのリンクがない）。

海外の方が国際会議等で日本のオープンアクセスの状況について言及するときは、このROARMAPの登録状況を根拠にすることが多いです。現状では、**せっかく策定されたオープンアクセス方針の7割近くが国際的に知られていないままになってしまっている**のを非常に悔しく感じています。

ROARMAPは英語のサイトで登録の敷居が高いかもしれませんが、JPCOARのガイドの付録4「ROARMAPの登録手順」で登録方法を詳しく紹介しています。さほど難しいものではありませんので、オープンアクセス方針を策定されている機関の皆さまはぜひ登録にトライしてみてください！ また、登録後はぜひJPCOARのリンク集にも掲載依頼のご連絡をいただけると大変ありがたいです。



出典：ROARMAP

（JPCOAR 広報・普及作業部会）

気になる話題を PICK UP!

JPCOAR Community ML（メーリング リスト） 投稿促進週間を実施しました！

JPCOAR Community ML は、リポジトリ担当の皆様が抱く、日々の業務の様々な課題や疑問について、話題の大小問わず、『気軽に』質問・投稿できる場です。広報・普及作業部会では、改めて本 ML を周知するとともに、よりご活用いただけるよう、2022/12/5 ～ 2023/1/10 を投稿促進週間として、積極的な投稿の呼びかけを行いました。ここではその一部をご紹介します。なお、記載に当たっては一部表現を編集しております。

Q1 Gold OA 論文でも機関リポジトリへ登録するための著作権処理が必要か。CC BY が付与されていれば、出版者のサイトからダウンロードした PDF をリポジトリに登録することが可能か。また Sherpa Romeo をどのように使ったらよいか。 [JPCOAR-Comm:251]

A1 Gold OA 論文でも、著作権の確認は必要である。パブリック・ドメインやクリエイティブ・コモンズ・ライセンスが付与されていれば、その条件の範囲内で転載が可能である。また Sherpa Romeo については、最初の概要確認の他、リンク集のような使い方をすることができる。例えば Sherpa Romeo で検索した後、“For more information, please see the following links” のリンクから、出版者のウェブサイトで著作権の取り扱いを最終確認すると、効率的に著作権についての記載があるページへたどり着くことができる。出版社を活用している個別の学会等に著作権があるような場合は、出版者内の共通の取り扱いとは異なる場合があるので、より注意して確認する必要がある。

補 足

過去の ML では、オンライン査読システムから直接ダウンロードした PDF を、著者最終稿としてリポジトリに登録することについての質疑応答もあった。まずは出版者ウェブサイトなどで Accepted manuscript の定義を確認する必要があるが、実際にはその記述がないことがほとんどである。判断が難しい場合は、登録可能な版であるかどうかを出版者に問い合わせる必要があるなどの投稿があった。
（参照：[JPCOAR-Comm:18] 著者最終稿のリポジトリ登録について、[JPCOAR-Comm:83] 査読システムが作成した PDF のリポジトリ登録について）

Q2 図書館資料の電子化作業を外部委託する場合に、どこまで OCR 処理の精度を求めたらよいか。 [JPCOAR-Comm:249]

A2 電子化作業を外部委託している館からの回答はなかったが、館内で電子化作業を行う場合の事例として、次の OCR 手順が共有された。まず複合機等でスキャンした PDF ファイルを Adobe Acrobat Pro で開き、論文毎に「ページを抽出」して分割、それぞれ別ファイルとして保存する。次に Adobe Acrobat Pro で「テキスト認識」→「複数のファイル内」から、分割したファイル全てを追加し「テキスト認識 一般設定」で、文書の言語：「日本語」、出力：「編集可能なテキストと画像」、ダウンサンプル：「600dpi」で設定し、OCR を実行する。

補 足

「紙資料から PDF を作成する」（平成 27 年度の機関リポジトリ新任担当者研修）や「機関リポジトリ登録論文のデジタル化について：市販の OCR ソフトにて作成した透明テキストデータの調査」では、Adobe Acrobat Pro（当時は旧製品）、eTypist、読取革命の 3 つの OCR ソフトを用いたファイルサイズや文字認識の精度の比較が報告されている。

- 森下映理「紙資料から PDF を作成する」 https://jpcoar.repo.nii.ac.jp/records/542 （2023/1/31 確認）
- 外崎みゆき「機関リポジトリ登録論文のデジタル化について：市販の OCR ソフトにて作成した透明テキストデータの調査」 https://kguopac.kanto-gakuin.ac.jp/webopac/NI90000004 (2023/1/31 確認)

※ML のアーカイブは、ML 本文のフッターに記載のアドレスからアクセスできます。

（JPCOAR 広報・普及作業部会）

EVENT REPORT

Workshop on Digital Library Development 参加報告

2022 年 9 月 29 日から 9 月 30 日にかけて、COAR-Asia OA とカンボジアの Center for Khmer Studies Library（CKS Library）によって標記のワークショップが開催されました。このワークショップの 1 日目午後のプログラム「4 Case Studies – Sharing Experiences on Developing Digital Libraries, Opportunities, Challenges, and Lessons Learned」において、事例報告として日本の機関リポジトリ構築の現状と JPCOAR の活動についてお話をしましたので、ご報告します。

このプログラムは、私を含めて 4 名の登壇者からオープンアクセス推進のための取り組みについての事例報告をした後、登壇者とワークショップ参加者が質疑応答を行い、質疑のやり取りについて、当日進行を務められた Wanna Net 氏（Royal University of Phnom Penh・カンボジア）からコメントがあって知識・理解を深化させる、という構成で行われました。

事例報告では、まず Net 氏から論文・データのオープンアクセス化の概要とご所属大学での取り組みについてお話があった後、Yuyun Wirawati 氏（Nanyang Technological University Library・シンガポール）と Sawitree Boonpalit 氏（Mahidol University Library and Knowledge Center・タイ）から、それぞれのご所属大学での取り組みについてご紹介がありました。それぞれの方のお話を聞き、オープンアクセスやコンテンツ提供について学内での理解を得ること、知識を担当内で継承していくことなど、問題意識が共通していると感じました。私からは、日本の機関リポジトリ構築機関数や登録コンテンツの構成、JAIRO Cloud・JPCOAR スキーマの紹介や、JPCOAR の体制・国内外での活動とこれからの展望についてお話をしました。

事例報告の時間が少し延びてしまったので、質疑応答を含めたディスカッションの時間は当初予定より短縮となったのですが、限られた時間でも参加者からは活発に質問が出ました。日本での取り組みについては、JAIRO Cloud 以外で機関リポジトリに使われているシステムや、学術情報流通で主流になっている英語との間にある言語の壁への対応などに関心が集まりました。

海外のイベントにオンラインで参加したことはありましたが、自分がそこで話すというのは不思議な感じでした。海外のワークショップで話すのですが、と職場の方などにお話しすると、せっかく海外なのに出張じゃなくて残念だね、とおっしゃっていただくこともありました。確かに残念と言えば残念なのですが、部署内の（それから家庭内も）調整をしたり、出張の手続きをしたりということがなく参加できたのはよかったかもしれません。オンラインだったので、知っている方が大勢覗きに来てくださっていたのも、ちょっと安心しました（大勢の知人に見られているかと思うと若干緊張もしました）。一方で、ほとんど経験のない英語での発表で、参加している方々の反応が見えなかったり、会場の空気感が分からなかったりするのは少し大変でした。

それでも、会場のカメラに映っている大勢の参加者の方たちからは真剣さが伝わってきましたし、海外の大学での事例をお聞きしたり、オープンアクセス・オープンサイエンスについての問題意識はやはり世界で共通なのだと実感できたりしたのは大変貴重な経験になりました。

末筆となり恐縮ですが、発表資料、発表内容をまとめるに当たって多大なるお力添えをいただいた方々、ワークショップへの派遣の後押しをしてくださった方々に、この場を借りて改めて御礼申し上げます。本当にありがとうございました。

安達 修介　（東京大学・イベント運営作業部会）

現所属では閲覧業務全般、JPCOAR イベント運営作業部会では初任者向け研修などのイベント企画・運営を担当。中学の時の「中学 3 年間の英語学習でなんとでもなる」という先生の発言を信じて今回の WS に参加。

勝手にコメンタリー

2022年11月25日に開催しました図書館総合展 JPCOAR 主催フォーラム「ダイヤモンド OA と機関リポジトリ」について広報・作業部会のメンバーでわいわい視聴しました！スルメを噛み締めるようにもう一度、フォーラムを味わってみませんか！！
黒バックの語句（初出箇所）には12ページ下に簡単な用語解説があります。
また、タイムラインの中央部の黒丸をクリックすると Youtube の該当箇所付近にリンクするので、ぜひご参照を！！

check!

フォーラムの動画は Youtubeで公開中

START 開会挨拶 (5:34)

司会：熊崎由衣（千葉大学）
挨拶：木下聡（東京大学／ JPCOAR 運営委員会委員長）

第 1 部 JPCOAR 活動報告 (23:52)

広報・普及作業部会報告 大園隼彦（岡山大学）

0:55 いいぞ大園さん！ @foz

1:52 JPCOARの研修資料アーカイブはうまくまとまっているのでぜひ利用してほしいです @Quqo

2:40 2022年のOAウィークのグラフィックはかっこいいですね @NG

3:15 MLの活性化なかなか難しいです… @ishi

関連して、これから委員会ではCAT/ILLに関してDiscordを使ったユーザーグループを試行しているみたいですね。いろいろな方法で各機関のスタッフがつながれたらいいなあと思います。 @ueki

5:03 ウェブマガジン楽しみですね～ @gana

イベント運営作業部会報告 佐藤翔（同志社大学）

6:12 月刊JPCOARは毎月イベント！ @gana

毎月は、すごいです。知らない人が結構多いので、係内にメールしたりしています @Quqo

月刊JPCOARのまとめページは多くの方にみていただきたいです @NG

8:00 イベント実施ノウハウもJPCOAR内に共有されるといいですよね @yk

まさに。イベントって力仕事なので大変ですが、やることで人脈も増えて広がっていくので、期待しています！ @foz

コンテンツ流通促進作業部会報告 片岡朋子（お茶の水女子大学）

11:00 いまだにhandleとDOIで付与できる資料タイプにどんな違いがあるか、イマイチわかってなかったりします @ishi

11:26 ちょうど本学もDOIとライセンスの付与を開始したばかりなので、この報告書は必読そう！ @gana

研究者へのDOIヒアリング、期待しています（普段、直接研究者の声を聴くことが少ないので） @Quqo

11:31 同意します。研究者のDOIの認識や、紀要出版の運用等はリポジトリ業務の参考になるのではないかと思います @yk

研究データ作業部会報告 結城憲司（九州大学）

14:15 RDMの教材はどれも必見だと思います。とてもわかりやすいですし、更新されているのがありがたい！ @Quqo

図書館員として勉強する、というだけでなく、自機関のRDM推進の参考にもなりますね @yk

17:30 新たな調査、結果が気になります。公表の際はぜひ広報をお願いします @Quqo

システム開発・連携作業部会報告 河合将志（国立情報学研究所）

19:48 THE LENSっていうデータベースがあるんですね @NG

19:55 OAアシスト機能、知りませんでした。全JAIRO Cloud利用機関が使えるのがすごい @Quqo

次期 JAIRO Cloud 移行タスクフォース報告

小野亘（東京大学）

23:00

JAIRO Cloud に関するメールが日々飛び交っていますよね、、作業部会のみなさんは大変ご苦労されていそうです。おつかれさまです。
機関同士でご意見や解決方法の提示等の助け合いもあり、参考になります🤗 @Quqo

23:52

ほかの部会の活動を知る機会が少ないので勉強になりました😄 @NG

第一部質疑応答

大園隼彦（岡山大学）／片岡朋子（お茶の水女子大学）／結城憲司（九州大学）

3:20

AXIESとの連携、頼もしく感じます。やはり研究データは関わる人が多様で、主担当も組織によって違いますし、奥が深くて広いです🚣 @Quqo

そうですね。また、図書館だけでなくて、研究者・技術者など様々な立場の方と協働するテーマだなと感じます。JPCOAR だけでなく、RDM に関わる活動を行っているコミュニティは複数あるので、タスクが重複しない、あるいは協力できるように情報交換しつつ国内の RDM の取り組みが推進できるとよりよくなるのではないかな、と思っています👧 @yk

4:37

熊崎さんの、「用語集は他業種の方たちとの共通認識を図るためのもの」というコメントに頷きました。OA に限らずいろんな人と仕事をするにあたって本当に必要なことですね😉👍 @foz

第 1 部質疑応答 (6:59)

第 2 部ダイヤモンド OA について (41:01)

0:39

ダイヤモンドとかプラチナとか誰が命名したんだろうか…🤔 @ishi

たしかに…ゴールドとかグリーンも、最初はピンときませんでした😅 @Quqo

趣旨説明 佐藤翔（同志社大学）

2:00

機関リポジトリが紀要の受け皿になっているという視点は、上層部の人にはあまりない気がする。雑誌記事の掲載率ばかり聞かれる。🤔 @ishi

2:16

いわゆる FREE ACCESS なだけでは、OA と呼べないのだろうか（ライセンスの問題？）" 無料 " で読めるのは読者にとってはおなじで、どのような違いがあるのか🤯 @ueki

3:18

DOAJの登録支援が気になる🧙 @zono

18:40 あたりで、紀要編集者側の意識が述べられていますね。編集者側には著作権処理などハードルが高い？→フリーアクセスで、ということになってしまうのかもしれないですね 🤔 @ueki

ここでは "OA の理念 " がなく、結果的にオープンになっているだけ、ということを仰っているのでは。読者にとっては無料で読める（ライセンスが明確だとなおよい）という点では変わらないでしょうけれど、提供側の意識の問題なのかなと思いました🙈 @yk

ダイヤモンド OA について

下城陽介（東京大学）

5:00

ダイヤモンド OA とゴールド OA と、どちらも OA になるし、結局投稿料がかかるのなら、研究者は既にある名の通ったゴールド OA に投稿することになる？🙄 @ishi

ダイヤモンド OA の概念、何度聞いてもわかったようなわからないような。お金の出元が違うのと、非営利だから価格上昇率がないよってのが 1 番の特徴？💎 @ishi

5:40

そうですよね、結局評価されるジャーナルに投稿したいと思うのでは…という気がします。研究者のご意見も聞いてみたいです👩 @yk

図書館や著者側からすると大きいですよね。商業出版の寡占状態も妨げられるのかな、とか、経済的な事情によって著者（APC払えないとか）や読者（購読料払えないとか）を学問的な不平等から救う、みたいな位置づけが強くあるのかな、と説明を聞いていて思いました🙂 @yk

6:21

ユネスコがダイヤモンド OA を提唱しているんですね💎 @gana

次期 JAIRO Cloud移行タスクフォース報告 小野亘（東京大学）

7:00

ダイヤモンド OA は Open "Access" というより、Open "Publish"（無料で投稿できる）であることに意義があるという感じなんですかね。Accessする側からすると、どちらもフリーでアクセスできることに変わりないわけですし💎 @NG

なるほど、そんな感じがします、納得しました👩‍🦳 @Quqo

「ダイヤモンド OA」としての紀要

設樂成実（京都大学）

9:30

ダブルブラインドレビューって何？🤔 @ishi

10:26

紀要の編集にはたくさんの関係者がいるんですね👨‍👨‍👨‍

22:33

そうですね。と同意しつつ、価値の定義って難しいと感じます。引用数みたいな評価だと商業出版と戦うことになりますし、分野の慣習によっても異なるでしょうし…🤔 @yk

紀要の編集はパワーがかかるのに研究者評価に関連しないのであれば、行うメリットがありませんね。紀要の価値 UP⇒編集者の評価 UP とつながればよいのですが📊 @Quqo

22:38

エジンバラ大学のダイヤモンドと OA を絡めたロゴがかわいい😍！ @gana

OAマークはいろんなバリエーションに使えますね（ふつふつ）♨️ @foz

学会による学術雑誌出版とダイヤモンド OA：保全生態学研究の例

小池文人（横浜国立大学／日本生態学会）

24:31

印刷媒体も大切にされているところが新鮮🐟 @gana

26:15

市民科学者の存在感が高まっているとのこと。**在野研究者** 荒木さんの特集とつながりますね～🌈 @gana

26:59

フリーの方が利用される。制限が大きくなるほど利用されにくい、と。✔ @zono

エンバーゴめ👺 @zono

27:38

パスワードでアクセス制限されていると、見られないっていうのはおもしろいですね。自分もパスワード探すのが面倒くさくて見ないことがよくあるので、実感としてもわかります🔎 @NG

29:32

著者から費用を取るということは、この雑誌はダイヤモンド OA ではないということですよね？💎 @NG

29:42

雇用者に年金、で計算してるんですね。（このワードに食いつくのはわたしだけか）🧐 @ foz

32:51

この編集方針好きです💕 @NG

33:37

紀要によって全然編集方針が違いますね。設樂先生の紀要の価値を上げたいというご意見も、読者に有益であれば紀要の価値は上がらなくても良いという小池先生のご意見もわかります🙇‍♀️ @Quqo

科学とは世の役にたつもの、という根源的な思想が反映されていて、わたしも好きです😍 @foz

39:19

全文**XML化**して自動翻訳！月刊 JPCOAR でも同じ話があったな～🕵️ @zono

40:17

ここ数ヶ月の AI の進化をみていると、高品質な自動翻訳も、もうすぐそこという気がします🚀 @NG

第２部質疑応答 (34:34)

第二部質疑応答

進行：佐藤翔（同志社大学）

設樂成実（京都大学）／小池文人（横浜国立大学／日本生態学会）／片岡朋子（お茶の水女子大学）

3:00

ダイヤモンド OA のお金の出元が政府などからの助成金となると、個々人が推進すべきと考えても、国策として推進しますという方針が出なければ、実現しない話🍿？ @ishi

3:34

ダイヤモンド OA を「推進する」ということが、どういうことなのか、ちょっとよくイメージできません。🤔 @NG

4:41

ダイヤモンド OA を推進していくべきか否かについて、ダイヤモンド OA 化の原資負担がどこから来るのか（学会か政府か、その他か）が重要という小池先生のご意見に納得。ただ程安いものはないもの💰 @gana

6:17

会費を払ってコミュニティに参画することの意義を考えさせられます🤔 @foz

7:42

学会の魅力は、大会にある！（そこにコミュニティがありディスカッションができる）🎊 @gana

9:22 評価につながるプラットフォーム。見え方、見せ方が変われば機関リポジトリも担えるのか？個人的にはどんどんプラットフォームが増えるよりは、リポジトリが担えれば良いなと思いますが、ハードルが高そう🚧🏃‍♂️ @Quqo

10:36 機関リポジトリ、ジャーナルプラットフォームとして失格？😭 @gana

11:28 J-STAGE での公開にも費用やコストがかかるんですね🤔 @NG

15:30 ワードに XML のタグを入れる（著者が論文をワードで書く段階で、タグを入れることで、論文情報を「構造化」し、後のプロダクション（書誌情報の生成とか）につなげる）というお話。そんなことできるんですねぇ。メタデータ作りが楽になる？というか作らなくていいのか💡 @gana

16:23 PDF ではなくウェブ（HTML）で論文を読む時代？機関リポジトリは、ウェブ版に対応できるのか🤖！？ @gana

22:00 広告収入の話になりましたが、以前誰かが機関リポジトリにも Youtube の投げ銭システムを取り入れたらいいのでは、なんてことを言っていました🏌 @ishi

22:03 企業広告をダイヤモンド OA の原資とする可能性🎺 @gana

27:10 査読は研究者の方の業務の中でかなり大きな割合を占めているのですね、知りませんでした。今はボランティアがメインということで、「査読疲れ」という言葉も印象的です😐 @Quqo

33:00 紀要の編集が大学ごとにまとまる⇒紀要の公開プラットフォームが機関リポジトリにまとまる⇒機関リポジトリが JAIRO Cloud にまとまる。というシナリオは確かにありかなと思います。多様性に欠けるような気もしますが、効率化、なのでしょうか🛣️ @Quqo

33:50 佐藤先生のモデレーション最高👍！@gana

FINISH 閉会挨拶 (1:32) 佐藤翔（同志社大学）

おまけ

簡単に用語解説 🎙️😀😎🙂😄😮🎙️

OA ウィーク：今号の pp.13〜14を参照ください

ML：メーリングリスト（ここでは JPCOAR のメーリングリスト）

CAT/ILL：NACSIS-CAT …オンライン共同分担目録方式により全国規模の総合目録データベース（図書 / 雑誌）を形成するためのシステム。NACSIS-ILL…図書館間で行われている相互貸借サービス（文献複写や資料現物の貸借の依頼及び受付）のメッセージのやりとりを電子化したシステム

これから委員会：これからの学術情報システム構築検討委員会

Discord：Discord：アプリ、Webブラウザ等で動作する、インスタントメッセージ・ビデオ通話・音声通話・VoIPフリーウェア

月刊 JPCOAR：JPCOAR が企画、主催する学術コミュニケーションオンラインセミナー

handle：ハンドルシステム（Handle System）は、インターネット上に存在するデジタルオブジェクト等の資源に対して、永続的識別子を付与・管理・解決するための技術仕様

DOI：デジタルオブジェクト識別子（Digital Object Identifier）は、インターネット上のドキュメントに恒久的に与えられる識別子

RDM：研究プロジェクト実施中に、個人の研究者あるいは研究グループが研究データ や関連の資料を管理すること

THE LENS：フリーの海外特許検索データベース

AXIES：大学 ICT 推進協議会

ダイヤモンド OA：オープンアクセスジャーナルのうち、著者に論文掲載料（APC）を請求しないモデルのこと

プラチナ OA：ダイヤモンド OA の別の言い方

ゴールド OA：出版者自身がジャーナルの Web サイトで投稿論文を公開するモデルのこと

グリーン OA：論文著者が自身の Web サイトや所属機関のリポジトリ等で論文（ないし原稿）をインターネットで公開するモデルのこと

DOAJ："Directory of Open Access Journals" オープンアクセス学術誌とその論文を掲載するウェブサイト

JapanKnowledge：ジャパンナレッジは、小学館グループの株式会社ネットアドバンスが提供する、有料会員制の知識探索サイト、インターネット百科事典

gray journal：灰色文献（gray literature；伝統的な商業出版や学術出版の流通ルートに乗らないため入手が困難な文献）に位置づけられるジャーナル

APC："Article Processing Charge(論文掲載料)"。論文をオープンアクセスで公開するために出版者が論文著者に支払いを求めるもの

WOS："Web of Science" 世界最大級のオンライン学術データベース

インデクシング：検索の利便性を高めるために、文献の内容を、統制語 と副標目 および チェックタグ により表現すること

J-STAGE：文部科学省所管の国立研究開発法人科学技術振興機構が運営する電子ジャーナルの公開プラットフォーム

在野研究者：今号の pp.1〜4を参照ください

エンバーゴ：出版者が論文著者に対して（グリーン OA による）論文公開を一定期間（多くは 6〜12 ヶ月程度）禁止すること

XML 化：XML とは、文章の見た目や構造を記述するためのマークアップ言語の一種。主にデータのやりとりや管理を簡単にする目的で使われ、記述形式がわかりやすいという特徴がある。XML 化とは、その形式に置き換えていくこと

おまけ

動画アシスト機能🕺💃🕺💃🕺💃

ブラウザで閲覧いただく場合、タイムラインの中央部の黒丸をクリックすると…なんと！ Youtube の該当箇所にリンクします。よろしければ使ってみてくださいね！

EVENT REPORT

Open Access Week 2022

オープンアクセス（OA）をテーマに、世界中のアカデミアが同時多発的に盛り上がる、国際オープンアクセスウィーク。2022年は「気候正義のためのオープンデータ」をテーマに各地で様々なイベントが催されました。開催時期も、オレンジというテーマカラーも、そのお祭りの“乗り”に至るまで、ハロウィーンとよく似ているこのイベントの作り方を学びたい。そんな思いから、今回リポジトリ担当1年目の山下（兵庫教育大学・広報・普及作業部会）が、OAマスクケースやブックカバーなどユニークなグッズ展開やイベント企画をしている千葉大学附属図書館のリポジトリ担当の皆様にオンライン・インタビューを行いました。

千葉大学附属図書　磯本 善男さん（右）
髙木 晃子さん（左）
粒來 珠佑さん（中）

1

2

3

（山下）そもそもなんですが、オープンアクセスウィーク（OAW）イベントを企画する目的は何ですか。

（高木）千葉大は機関リポジトリの歴史は古いのですが、グリーンOA（雑誌論文の登録）が学内に浸透していない面があります。その点で、OAWは研究者にOAの意義を伝える重要な機会と捉えています。

（山下）毎年実施しているんですか？

（髙木）2018年以降は毎年続いています。

（山下）どんな企画をされているのでしょうか？

（磯本）2019年と2020年はポスター展示だけでしたが、2021年には「1210あかりんアワー」という、アカデミック・リンク・センターの学内者向けショートセミナー企画とコラボして、図書館員がOAを紹介するトークイベントを行ったりしました。

（山下）昨年（2022年）は「気候正義のためのオープンデータ」というテーマでしたが、いかがでしたか。

（髙木）テーマが例年になく具体的で、いつもと様子が違うなと思いました。OAWのウェブサイトではポスターのウクライナ語版も提供されていて、何か社会問題へのコミットメントの姿勢が強く打ち出されているように感じました。

（磯本）2021年の「1210あかりんアワー」での OAWイベントでは図書館員が登壇しましたが、2022年はせっかく具体的なテーマが出たので、関連分野の研究者を探してオファーしました【写真1】。

（山下）ウェブサイトでテーマに関連するリポジトリ文献を紹介されているのもいいですね【写真2】。とはいえ、こういう細部にまで手の込んだ企画ができるのはやはり千葉大さんのような大きな図書館だけで、スタッフがひとりふたりの小さな図書館ではなかなか手を出せないと思うのですが。

（磯本）確かに私もひとりでやれと言われたらできないと思います。ただ、ポスター１枚貼るだけでも、OAWの取り組みになると思います。本学でもポスター展示だけ実施した年がありますし。

（粒來）それと、ポスターでも何でも、一から始めるのは大変なので、過去に作製したものや、他機関からもらった素材を“プチ変更”すれば、作業も効率的になると思います。2022年はブックカバーを配布したのですが、これは4年前の2018年に作ったもの。学部4年のサイクルが一巡したため、再登場してもらいました【写真3】。

（山下）ハロウィーンの「Trick or Treat」（お菓子くれなきゃ、いたずらするぞ！）をもじった「Trick or Open！」がいいですね。私もグッズを作ってみたくなりました。千葉大さんや他機関の事例も参考にさせていただきながら、2023年の企画をこれから温めたいと思います。本日はありがとうございました！

｜インタビュアー｜　山下真人（兵庫教育大学・広報・普及作業部会）

気になる

OAWeek Goods！

ふたつ並べるとリアルな目になっちゃうという愛すべき妙案！ くりっとした眉がたまらないけれど、目力がちょっと強すぎ？ 出版社との交渉はこのメガネで臨むべし。

今や OA グッズの定番といえる三角スタンド。図書館の閲覧席はもちろんですが、食堂やカフェのテーブルなども効果的。食堂といえば、トレイマット広告という手もありかも。

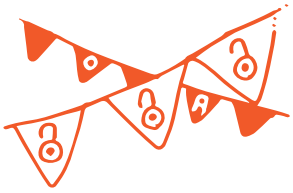
アイデアがないときは、とりあえずオレンジ色の服を着る、布を巻くなどでもイベント感は十分。自分が着るのが恥ずかしければ、キャンパスの銅像とかに「お仕着せ」しましょう。

コロナ禍を機に、千葉大学のマスクケースなど新たなグッズが続々登場。視覚要素が少ないオンライン会議では、バーチャル背景が確かに重要な広告メディアになりますよね。

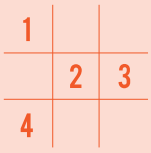
OAW の目玉企画のひとつ、研究者インタビュー。図書館員が OA しゃもじを掲げて、傍若無人のヨネスケ役を買ってでる「突撃となりの研究室」なんていうファンキー企画も。

家電量販店などではよくみかける階段広告。図書館ではあまりみないけれど、確かに広告の穴場ですね。階上へのポスターへと誘う「広告のための広告」という仕掛けが素敵。

「気候正義」をテーマに、世界で多様なトークイベントが盛り上がった 2022 年。理系一色かと思いきや、英国では Z 世代のエコ活動家による詩の朗読会なんていう文系イベントも。



お祭り感を出すための、最も効果的で定番のアイテム、ガーランド。時期も色も共通だから、ハロウィーンイベントと兼用も。ストリングライトを付ければもっと雰囲気が出ますよ。



1 筑波大学附属図書館 2016
2 東京歯科大学図書館 2015
3 小樽商科大学附属図書館 2015
4 ランカスター大学図書館 2022

研究データ作業部会

「研究データ管理事例集」を公開しました。

2022年9月、「研究データ管理事例集」を公開しました。

本事例集は、JPCOAR 研究データ作業部会および大学 ICT 推進協議会研究データマネジメント部会（AXIES-RDM部会）が、2019-2021 年度に実施した「RDM 事例形成プロジェクト」の成果となります。

掲載されている各機関の取組事例は、研究データ管理を進める上で参考になるものと思います。是非ご活用ください。

目次

●研究データ管理支援

データ公開リポジトリの開発・運用（国立環境研究所）/ 全学的な研究データ及び実験機器の共有化（岐阜大学）/ 研究成果の利活用に向けた基盤サービス連携（理化学研究所）/ 全学的な研究データストレージ環境の整備（金沢大学）

●研究データ公開・利活用

研究組織別のデータ公開・利活用を支援する環境の提供（理化学研究所）/ 機関リポジトリによる研究データの公開パターン分析（北海道大学）/ 外部検索エンジン最適化に向けた取り組み（北海道大学）/ データ利活用の促進と支援に向けた学内データベースの所在調査（名古屋大学）/ 運用が停止された学内データベースの再構築（総合研究大学院大学）

●利用者支援

研究データ関連の講習会開催（国立環境研究所）/ オープンサイエンス・オープンアクセス支援サイトの開設（名古屋大学）/ メタデータ作成・データの知識化に向けたコンサルティング（理化学研究所）

●管理体制の構築

付録データを含む機関リポジトリコンテンツへの CC ライセンス付与（日本原子力研究開発機構）/ 論文に紐づく研究データのアーカイブ手順の整備（沖縄科学技術大学院大学）/「日本原子力研究開発機構研究データの取扱いに関する基本方針」の策定及び内規の整備（日本原子力研究開発機構）/「国立大学法人東京工業大学の研究データポリシー」策定（東京工業大学）/「京都大学研究データ管理・公開ポリシー」策定及び実施方針の策定に向けた検討（京都大学）/ 全学的な研究データ管理支援部門の設置（九州大学）

●事例の傾向分析

結 城 憲 司（九州大学・研究データ作業部会）

学認 LMS において 3 つの RDM コースが公開されました。

2022 年 12 月、国立情報学研究所（NII）が提供する「学認 LMS」において、以下の 3 つの研究データ管理（RDM）のコースが公開されました。

【新規公開】「情報基盤スタッフ向けの研究データマネジメント」
【最新版公開】「研究データ管理サービスの設計と実践」[2022 年度版]
【最新版公開】「研究者のための研究データマネジメント」[2022 年度版]
※利用申請済みの機関のみコンテンツにアクセスできます。申請していない機関の場合、「ゲストとしてログインする」をクリックすると目次を閲覧できます。

「学認 LMS」とは、高等教育機関における共通の教育コンテンツの提供と、受講履歴を管理することができる学習管理システムで、受講者が合格基準に達した場合は、コース修了のバッジが発行される仕組みとなっております。

本コースは、JPCOAR 研究データ作業部会（情報基盤スタッフ向け教材は大学 ICT 推進協議会研究データマネジメント部会）が作成した RDM 教材を元に作成されており、公開にあたっては内容の更新・修正やテスト問題の作成にも協力しております。

なお、「学認 LMS」を利用するためには、NII に機関としての利用申請が必要となります。新規に利用を開始する機関は、以下の学認 LMS サポート担当にご相談ください。

学認 LMS サポート担当（国立情報学研究所　学術基盤推進部）
gakunin-lms-support@nii.ac.jp

結 城 憲 司（九州大学・研究データ作業部会）

研究データ作業部会

国内機関における研究データ管理の取り組み状況調査（2022）を実施しました。

2022年11月28日から12月28日まで、国内機関における研究データ管理の取り組み状況調査（2022）を実施しました。

本調査は、前回調査（2020年11月27日～12月28日実施、質問数46問、有効回答352機関）に引き続き実施するもので、質問数は48問になります。調査・分析にあたっては、大学ICT推進協議会研究データマネジメント部会（AXIES-RDM部会）および科学技術・学術政策研究所（NISTEP）データ解析政策研究室の協力を得ております。

この度は多くの機関に調査にご協力いただき、どうもありがとうございました。

前回調査からの主な変更点は以下のとおりです。

1）調査における研究データポリシーの定義の明確化

前回は、ポリシー策定済と回答した割合が想定していたよりも高く（17.6%）、いわゆる「10年保存ルール」等をもってポリシー策定済と回答した機関が含まれていると考えられることから、研究データポリシーの定義が明確になるように改善しました。

2）研究データ管理サービスについて質問内容を変更

前回は、図書館による研究データ管理サービスに限定していましたが、それ以外の部署で実施・検討されているものも把握したいと考え、質問内容を変更しております。

3）研究データ保存用ストレージに関する質問の追加

前回は、研究データ保存用ストレージの提供有無、及び、基本容量を聞いておりましたが、どの程度の基本容量の提供が必要と考えているのかという質問を追加しました。

4）調査方法の一部変更

前回は、調査依頼・回答先をJPCOAR（全体・図書館向け）とAXIES（情報系センター向け）で分担した結果、集計・分析が複雑になってしまったという反省から、回答率が高かったJPCOAR側に集約しました。

また、前回はWordファイルでの回答も認めておりましたが、極めて少数であったことからGoogleフォームによる回答に一本化しました。

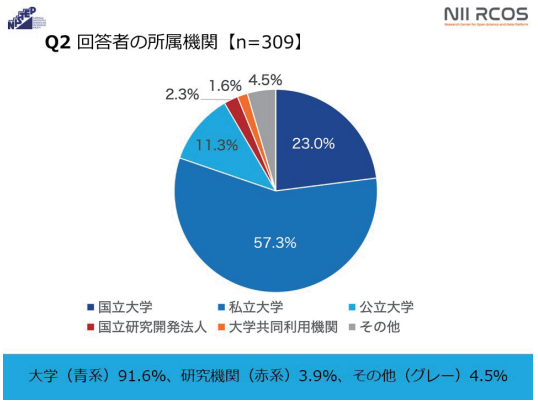
前回調査の集計・分析結果については、以下のご参照ください。

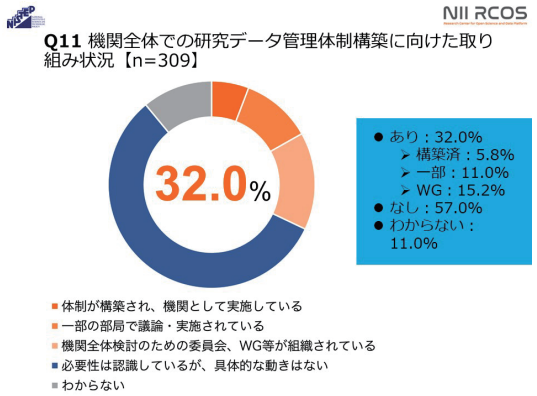
●集計結果（2021年4月）：「2020年度RDM事例形成プロジェクト中間報告書」

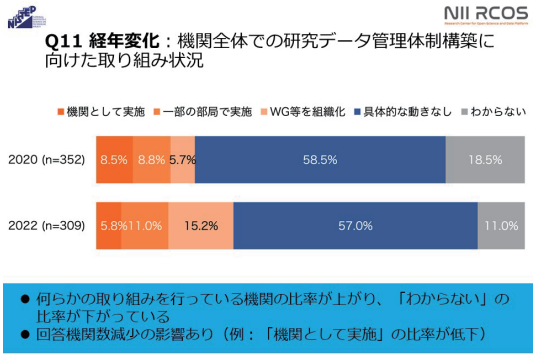
●NISTEPによる分析結果（2022年3月）：池内 有為、林 和弘 著「日本の研究機関における研究データ管理（RDM）の実践状況－オープンサイエンスの実現に向けた課題と展望－」

それでは、今回の調査の集計結果を速報値（暫定版）で報告させていただきます。あくまでの速報値であり、今後変更になることもありますのでご了承ください。

結城 憲司（九州大学・研究データ作業部会）



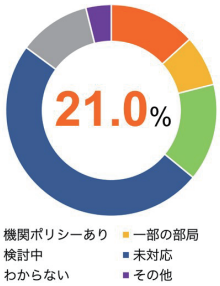




研究データ作業部会

NII RCOS

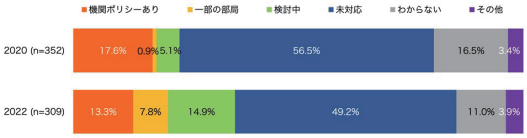
Q12 研究データ管理に関するデータポリシーの策定状況【n=309】



- あり：21.0%
  - 機関全体：13.3%
  - 一部の部局：7.8%
- 検討中：14.9%
- なし：49.2%
- わからない：11.0%
- その他：3.9%

NII RCOS

Q12 経年変化：研究データ管理に関するデータポリシーの策定状況

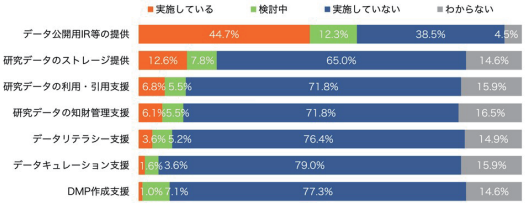


- 2年間で研究データ管理に関するデータポリシーの策定・検討が進展

注：2020年調査では研究データ保存ポリシーが「機関ポリシー」に含まれていた可能性あり

NII RCOS

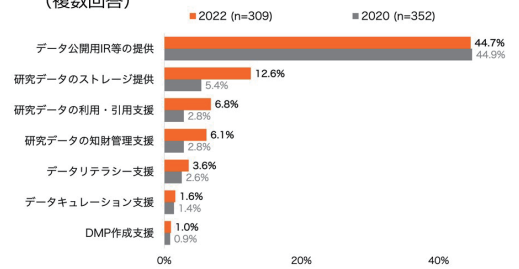
Q18 研究データ管理サービスの実施状況



- データ公開プラットフォームやストレージなど、基盤提供が中心
- 全体的に「実施していない」、「わからない」の選択率が高い

NII RCOS

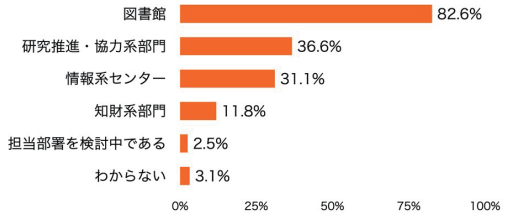
Q18 経年変化：研究データ管理サービスの実施状況（複数回答）



- 2020年と順位は変わらず
- 研究データのストレージ提供、利用・引用支援、知財管理支援が増加

NII RCOS

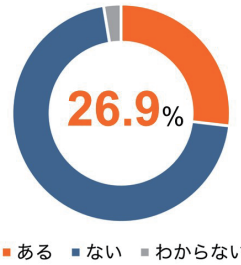
Q19 研究データ管理サービスの実施部署【n=161】（複数回答）



- Q18で何らかのサービスを実施している場合の実施部署
- IRの担当部署であることから図書館の比率が高い

NII RCOS

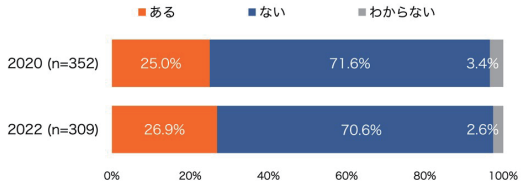
Q22 2021～2022年の機関リポジトリによる研究データ公開事例【n=309】



あり（26.9%）、ない（70.6%）、わからない（2.6%）

NII RCOS

Q22 経年変化：2021～2022年の機関リポジトリによる研究データ公開事例【n=309】



コンテンツ流通促進作業部会

学協会著作権ポリシーデータベース（SCPJ）二次利用に関するライセンスガイドラインの策定

学協会著作権ポリシーデータベース（以下 SCPJ）とは、日本国内の学協会の機関リポジトリに対する論文掲載許諾状況の一覧を提供するデータベースで、Google スプレッドシートで公開しています。国立情報学研究所の平成 22 ～ 24 年度 CSI 委託事業（領域 3）で開始した「オープンアクセスとセルフ・アーカイビングに関する著作権マネジメント・プロジェクト」で作成されたデータベースであり、2020 年 3 月に運営を JPCOAR が引き継ぎました。SCPJ は学協会の皆さまにご回答いただいた情報を元に作成されており、学協会からのご連絡を元に、データの追加や更新を行っております。2020 年 12 月から 2021 年 2 月にかけて、大規模なデータメンテナンス 1) を行いました。2022 年度は、SCPJ の利用を促進するための活動として、ウェブサイトの英語翻訳ページ作成のほか、SCPJ の利用に関する「SCPJ データベース二次利用に関するライセンスガイドライン」2)を策定しました。

今後、SCPJ はクリエイティブ・コモンズ・ライセンスの「表示 - 改変禁止 4.0 国際」（以下 CC BY-ND 4.0）3) と、JPCOAR が独自に定めるライセンスのデュアルライセンスとして運用します。いずれかのライセンスを遵守することで、一定の範囲内で SCPJ を自由に利用することが可能です。この記事では、各ライセンスの概要及びその目的をご紹介します。

CC BY-ND 4.0 の概要

国際非営利団体クリエイティブ・コモンズの定めるライセンスは、ライセンス上で示された条件の範囲内で、著作物を自由に利用してよいという意思表示を示すツールとなります。政府刊行物の利用について定める「政府標準利用規約（第 2.0 版）」4) においても、クリエイティブ・コモンズ・ライセンスの「表示 4.0 国際」（CC BY）と互換性があると明記されており、国際的なライセンスとして認知度の高いクリエイティブ・コモンズの影響力を鑑み SCPJ においても採用することといたしました。

CC BY-ND 4.0 の条件は、利用にあたって「1. 適切なクレジットを表示すること」、「2. 内容を改変しないこと」です。SCPJ 上に登録されている学協会の許諾状況に関する情報については、個人が個別に変更し再配布することを制限しなければならないという意図の元、CC BY-ND 4.0 としました。

JPCOAR が独自に定めるライセンスの概要

CC BY-ND 4.0 というライセンスのみで運用する場合、登録データおよびデータベースの表示形式等を含めて内容を改変することが許されないため、現在島根大学で作成・公開されている「日本の学協会の著作権ポリシー確認ツール」5) のように SCPJ のデータを利用したツールの作成等の利用が妨げられてしまうことが想定されます。CC BY-ND 4.0 を下敷きに、それよりも柔軟な独自ライセンスを定めることでより多くの利用を促進するというねらいの下、2022 年 12 月 26 日に独自ライセンスを策定しました。

本ライセンスの条件は、利用にあたって「1. 出典を明記すること」「2. 内容のうち、登録されている個別のデータを改変しないこと」です。このライセンスに従う限り、前述の確認ツールのように SCPJ を円滑に活用するための各種利用が可能となります。

まとめ

これらのライセンスの役割は、SCPJ を利用したツールを開発・公開される方に対する意思表示であり、SCPJ のより円滑な利用を促進することを目的としています。そのため、これらのライセンスを策定したことによって、機関リポジトリ登録において SCPJ を参照するといった一般的な利用に不都合が生じることはありません。また、今後の社会の変化に応じて、これらのライセンスは修正されることも考えられます。

SCPJ が活用しやすくなることで、機関リポジトリへの研究成果登録が促進され、オープンアクセスが更なる発展を続けることを期待しております。

野村 周平（横浜国立大学・コンテンツ流通促進作業部会）

（注）

1）JPCOAR「SCPJ データメンテナンス結果報告」
2）JPCOAR「SCPJ データベース 二次利用に関するライセンスガイドライン」
3）クリエイティブ・コモンズ「表示 - 改変禁止 4.0 国際（CC BY-ND4.0）」
4）総務省「政府標準利用規約（第 2.0 版）」
5）島根大学「日本の学協会の著作権ポリシー確認ツール」

JPCOAR の新しいロゴマークを募集します！

JPCOAR では、コミュニティの活性化と対外的なプレゼンスの向上を目的にロゴマークのリニューアルを企画しています。コミュニティによるコミュニティの「顔」となるように、皆様のアイディアをお寄せください。

｜制作条件｜
・シンボルマーク（図）とロゴタイプ（文字）を組み合わせたデザインまたはロゴタイプ（文字）のみを募集します。
・「JPCOAR」のイメージがわかりやすく伝わり、さまざまな媒体で展開できるデザインをお寄せください。

JPCOAR
Japan Consortium for Open Access Repository

↑

このロゴマークに替わる
新ロゴマークを大募集！

｜応募資格・応募点数｜
・JPCOAR 会員機関に所属する方。個人・団体は問いません。
・応募点数の制限はありません。

｜応募方法｜
以下の 3 点を下記の提出先宛てに電子メールでお送りください。
1. ロゴマーク（JPEG または PDF ファイル）
2. デザインの趣旨（200 字程度）
3. 氏名・所属機関・電話番号・メールアドレス

｜締め切り｜
2023 年 4 月 28 日（金）17 時（必着）

｜発表｜
2023 年 6 月（予定）

｜賞金｜
なし

｜提出先・お問い合わせ｜
JPCOAR 広報・普及作業部会
community@jpcoar.org

詳細は、JPCOARウェブサイトに掲載の募集要項をご確認ください。

2023年6月JPCOARウェブマガジンがスタートします！

JPCOAR 発足当初から 6 年間にわたりご愛読いただいておりました本誌 JPCOAR Newsletter：CoCOAR は、2023 年 6 月より JPCOAR ウェブマガジンとして生まれ変わります。乞うご期待！

その１　読みやすい
　1クリック & モバイル対応
その２　タイムリー
　記事ごとの発行
その３　共有しやすい
　記事単位のURLで拡散希望
その４　マルチメディア対応
　音声や動画もいけます
その５　見つけやすい！
　独自ドメイン　&　SEO 対応

編　集　後　記

JPCOAR と CoCOAR はもうじき 7 歳、人間で言えば新小学生です。このステップアップをみんなで応援してください。（尾崎）

Web magazine へと、進化を遂げる CoCOAR を見習って私も進化したい！ご愛読ありがとうございました。（栗田）

CoCOAR の次のステップでも、皆様と一緒に JPCOAR の情報発信・共有を盛り上げていけたら嬉しいです。（熊崎）

最終号にしてとてもすてきな誌面となりました。ウェブマガジンもご期待ください。（南雲）

初めて CoCOAR の編集作業に関わりましたが、ぎりぎり終号に間に合い、とても貴重な経験ができました！（石山）

CoCOAR の名称とロゴマークに込められた想いを継承しながら、羽ばたけ！ウェブマガジン。（永井）

CoCOAR とかけまして、お父さんお母さんと解く、その心は…ご想像にお任せします（山下）

これまで CoCOAR をご愛読いただきありがとうございました。参考になった記事があったら嬉しいです (山田)

ウェブマガジンは 2023 年夏ごろスタート予定です。スマホのお気に入りに登録してください！（大園）

媒体を一新して、これまで以上にタイムリーに記事をお届けします。ぜひ、ウェブマガジンをご愛読ください。（植山）

ウェブマガジン化でこれまでよりもスピーディに JPCOAR の活動やオープンサイエンスのいまを紹介していきます！（林）

Web Site
https://jpcoar.repo.nii.ac.jp/

Facebook
https://www.facebook.com/jpcoar/

Twitter
https://twitter.com/jpcoar/

本文の URL・ハイパーリンクは 2023 年 2 月 28 日時点のものである（記載のある記事を除く）。

JPCOAR Newsletter : CoCOAR　第 16 号
2023 年 3 月 22 日 発行
オープンアクセスリポジトリ推進協会

記事中の画像は
CC BY の対象外です。